

四十余年未顕真実の意義

横 超 慧 日

日蓮の著作の中で、立正安国論・観心本尊鈔と並んで最も重要視せられるものに開目鈔がある。その開目鈔の中に、次のようなことが書かれている。

佛御年七十二の年、摩竭提国靈鷲山と申す山にして、無量義経をとかせ給ひしに、四十余年の経々をあげて枝葉をばその中におさめて、四十余年未顕真実と打消し給はこれなり。

これによると、釈尊は七十二歳の時に靈鷲山で無量義経を説かれたが、その中で四十余年未顕真実と言われているから、成佛が三十歳の時であったとすれば七十二歳の時まで四十二年経ったことになる。その四十二年間に釈尊は実に多くの経を説かれたに相違ない。その多くの経が全部まだ真実を顕さない時の説法であったと言つて、無量義経では否定されているという。これが開目鈔でここに言われている趣旨の概要である。日蓮はどういう目的でこれを言ったのかというに、それは法華経のみが真実で、他の經典はすべてそれ以前に説かれたものであるから真実ではない。

まだ方便の教である。故に方便の教は如何に此を受持し誦誦してもそれによって成佛することはできぬと言いたいのである。日蓮のこの目的がどうして前に引いた無量義經の未顕真実説に結びつくかと言う理由を理解するためには、もう少し説明が要る。

がんらい無量義經と法華經と觀普賢經とは法華の三部經と言って一具の經典とされている。どうしてそれが一具になるかと言えば、無量義經は法華經の直前に説かれ法華を説くための序として前段階をなしているから、此を開經という。法華經を開きおこすということ趣旨とした経だといふのである。これに対して觀普賢經は法華經の直後に説かれて法華のしめくりをしているからという意味で、これを結經という。淨土三部經では、無量壽經と觀無量壽經と阿彌陀經との間に説時の前後關係はなんら問題にされていないので、それを云云するようになったとすれば、それは法華三部經を信仰する人々に対応する必要からおこったものである。ともかく法華の三部經は別に「法華經並びに開結」と称されるのでも知られるように、無量義經と法華經と觀普賢經とが時間的に接続して説かれたものだという考方が基礎になっている。では果して事実そういうことになっているかどうか。こんどはその点を確かめてみよう。

無量義經を見ると、この經のあとで法華經が説かれるというようなことを豫告した文はない。それはそんな豫告などなくても、とりたてて問題にすべきではなからう。なにも次に説くべき經を豫告などしなければならぬ理由はないからである。それよりも、「如来の得道より已來四十余年、常に衆生のために法を演説してきた」とか、「種々に法を説くこと方便力を以てす、四十余年未だ真実を顯さず」とか言われている。又、「善くこれ時なるを知って、汝の所問を恣にせよ、如来久しからずしてまさに般涅槃すべし」とも言われている。これによると、佛成道後四十余年を経た時の説法であり、入滅の時を去ること遠からざる時期に至つての説法であつたことになる。一方こんどは法華經を見ると、涌出品には、「如来、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり、これより已來始めて四十余年を過ぐ」とある。又、見宝塔品には、「今正しくこれ時なり、如来久し

からずしてまさに涅槃に入るべし」とある。これによると、佛成道後四十余年を経ているということと、入滅の時久しからずということと、この二点は無量義經と全く一致する。然しこうした年時の上から法華經と無量義經との関係が同時的に示されているだけでなく、いま一つ重要なことは、無量義經と法華經との前後接統の關係を示す明白な文が法華經の中にあることである。即ち法華經の最初の序品には、佛が無量義經を説いてから無量義經三昧に入られたといひ、次の方便品の初にはその三昧から出ていよいよ法華經の本論がはじまったということになっている。それだけでなく、序品の中に出てくる昔の日月燈明佛は無量義經を説いてからいろいろの奇瑞を示した後に法華經を説かれたが、今も無量義經を説いた後に佛はいろいろの奇瑞を示されているのであるから、これは法華經がこれから説かれる前兆にまちがいないということが、文殊菩薩の言葉として説かれている。こういう点からみて、無量義經が法華經の直前に説かれたということは、經文の上で明かに根拠があることが知られる。

二

以上によって日蓮が四十余年未顕真實を言った理由はほぼ判ったと思う。然しこれは日蓮の創意に由るものではない。日蓮教学の背景になっている天台宗で、そういうことを久しく言い伝えてきたのである。天台宗は隋の智顛に始まる宗派であるが、智顛の歿後凡そ四百年近くも経た頃、高麗の諦観によって作られた天台教義の入門書たる天台四教儀によると、このことがはっきりする。天台四教儀は天台宗の教相判釈たる五時八教を簡明に叙述しており、中でも冒頭にある五時説によると、佛陀は成道後、華嚴時、鹿苑時、方等時、般若時、法華涅槃時の五時の順序を経て説法せられたのであり、佛一代の聖教はこの中にすべて収まると言っている。この五時のそれぞれがいったいどれほどの年時であるかについては古来異説があるが、南宋の元粹が四教儀の注釈書として書いた備釈の中には

とあって、華嚴時は成道後最初の三七日間、阿含時は次の十二年間、方等時はそれから八年間、般若時はつゞいて二十二年間、法華と涅槃とは合して八年間というのである。これによると法華経が説かれるまでに四十二年経っていることになる。そして涅槃経は佛の入滅迫った時一昼夜の説であることが涅槃経の初に言われているから、そうしてみると法華経は成道後四十二年から八年間の説法であったという計算になる。

こういう年時の算定はどこから出てきたかということが次に問題になる。法華経の中には四十余年とあるが、四十二年とはない。まして八年間などということはどこにも出ていない。他の華嚴時以下四時の年数についても問題はあ
るが、今は法華経だけに限って考えてみよう。先ず法華経が、佛成道後四十二年にして説かれたということは、何に出ているかというに、それは菩提流支という人の法界性論という本に出ているということ、唐の荊溪湛然が法華玄義釈籤五上の中で言っている。この法界性論という本は今存在しないし、他に引用されたものもないようであるから
どんなものであったかよく判らぬが、ともかく菩提流支は北魏の人で六世紀初に翻訳した三蔵であり、湛然は八世紀の人であるから二百年以上経っている。そして湛然が釈籤で法界性論を引いている、ただ法華経は成道後四十二年の説だということが菩提流支の法界性論に出ているというだけのことであるから、湛然の引用に果してどれだけ信賴性があるか疑問であるが、それよりも尚重要なことは我々が法界性論そのものにどれだけ価値を認め得るかである。
仮に法界性論が佛伝の記録書であったとしても、それは佛滅後千年程の頃の書である。どうしてこれに全面的信賴をおかねばならぬのであろうか。況んやその書が現存せず、引用の仕方にも確実性があると言えぬに於ておやである。
然し佛の四十二年説ということを裏づける別の証拠が他にないではない。智顛の法華玄義五上に相伝して云う、佛、年七十二歳、法華経を説きたまふ。と云っている。これは智顛の説であるから湛然より約二百年早いけれども、相伝の説というだけで確たる根拠があつての説ではない。智顛自身も法華玄義五下の中に法界性論を引用しているから、
根拠は湛然と同じであつたかも知れぬ。佛が年七十二歳で法華経を説かれたということは、佛が三十歳で成道し八十

歳で入滅せられたとすると、七十二歳は成道後四十二年に当り、それからちようど八年間法華經を説かれたとする説にうまく合うようである。法華經が八卷であるということとも何か関連を思わせてまことに都合がよいのであるが、事實は以上の如くで、何等根拠あつての説ではない。

三

それでは智顛自身はどうみていたであらうか。智顛の考は法華玄義第十卷の教相を論じた所に詳しい。又、智顛自身の書いた四教義の中にも彼の考え方が詳細に論じられている。それによると、佛陀の教説を内容的に体系づけて解釈するため前に挙げたように華嚴時以下法華涅槃時に至る五時の順序をつけているが、決して各經典の説き初めた時だとかその期間を決定したり限定しようというのが趣旨ではなかった。だから相伝による七十二歳法華説を引用してはいるが、自分でそれを固執してはいない。彼に在っては、佛陀説經の年時を判定しそれによって教説の眞実か否かをきめようなどというつもりは全くなかったのである。經典の説時を手がかりにして經説の前後を考えそれによって方便説と眞実説との連繫を見出そうとする説は、智顛以前にもあつた。否すでに法華經が翻譯された五世紀の初からそうした見解が起り、以来多くの人々によってうけつがれてきた。智顛はそれを十分承知して、その一面的な理解に対し厳しい批判を行っている。それでは、智顛の説はそれ以前の説とどんな点に相違があり、又その趣旨はどこにあるかというに、簡単に言うことはできないが最も重要な一点だけを言えば次のようなことになる。

即ち智顛以前の人々も、四時だとか五時だとかに分けて、佛陀の説法を經典を中心に段階的に並べたことがあつた。その点で智顛と共通しているようであるが、宋の慧観や梁の智蔵法雲等は、前の教は後の教より浅く、後の教は前の教より深いから、最後の教に至って最高に達し、そこで初めて眞実が明かになるという。その意味でいわば直線的若しくは平面的であつたと言つてよい。眞実は後にのみあつて前にはないというのである。これに対して、智顛は、一

つの経若しくは一つの時には唯だ一種の教のみが説かれるのでなく、人々の能力や関心を顧慮して、種々なる教が適宜組み合せて説かれる。その組み合わせ方には様々な変化や様相があり得るから、それが多くの経となったのである。然し多くの経となったと言っても凡そ五種類のグループに分けられるのであって、それを中心とする経によって命名すれば、華嚴時、鹿苑時（阿含時）、方等時、般若時、法華涅槃時となる。経の中には華嚴経が成道の最初の説であるとか涅槃経が最後の説法であるとかいうように説時を明示しているものもあるから、そういうことを考慮して配列を考えれば以上の五時の順序となる。智顛はこのように考えて五時を立てた。故に彼からすれば、単純に最後にのみ真実があるというのではない。その意味で復合的であり立体的であると言ってよいであろう。尤も、智顛も教の中に真実なるものと方便的なるものとを区別し方便の教の中にも三種の別ありとする。そして彼は最初の華嚴時には真実の教と方便の中の一つの教とがあり、最後の涅槃時には真実の教と方便の教の三種との以上全部が一往は説かれているとする。従って真実の教は法華経のみではないが、ただ他に在っては方便の教のみであるか又は真実の教と方便の教とが複合しているのかの何れかであるのに対して、真実の教のみを説いたのは法華経だけであって、その点は法華経の最も比類なきすぐれた点であるという。

それでは智顛は如何なる理由によってこうした結論に到達したかと言うに、要約して言えば次の如き事情に由る。即ち、佛陀はすべての人を佛たらしめるために、種々の経を説く。それは何のためかというに、佛の目的は一つであつても、最初から真実の教のみを説いたのでは、人々の能力に相應せず人々はそれを受け入れようとしなない。そこで真実の教と方便の教とを種々に組み合せて説いたので、その結果多くの経が説かれることになったのである。然し佛の真意はすべての人を皆佛にさせるためであつた、それ故佛の真意を汲んで何人も佛になることを志さねばならぬということが、法華経方便品に明かにされている。この法華経方便品の説によって始めて、佛教に種々の不同ある所以と及びその種々なる教が共通の一つの目的に統合される所以が明かになるのである。してみれば法華経は他の諸経を

否定する教でなく、どの経もそれぞれに大きな意味を持つものであることを位置づけるものであるという意味で、彼らは法華経を如来の出世本懷を明かした経とみたのであった。決して法華経によってのみ救われ他の諸経では救われぬというような考ではなかった。法華経の精神には相待面と絶待面とがあるというのが智顛の立場で、殊に相待を離れぬ絶待に重点を置く智顛としては、經典相互間に優劣を判じ取舍を加えることはその真意ではなかった。その智顛に基く天台宗の中から優劣を判ずる相待面の方に重点が移っていったのは最澄以来のことで、これが進んで日蓮の立場を生むこととなっていくのである。

四

智顛の天台宗から浄土教が興ったのは、以上の如く考えると、敢て異とするに足らぬことが知られるであろう。智顛からすれば法華経のみが真実の教だというのではなく、大乘の諸經典の中にはすべて真実が含まれている。その真実が含まれているということを知らせたのが法華経であって、法華経は如何にしてそのことを知らせたかと言えば、佛陀の出現はすべての人を皆佛たらしめるという唯だ一つの目的を持ったものであり、あらゆる教はこの目的実現のための方便であると説いているのに由る。そうしてみると方便というのは真実と別なものでなく真実を実現するはたらきが方便であり、真実と実は一体なるものであると言わねばならぬ。決して手段となった仮のものというような意味でなく、嘘いつわりのものというような意味でないことはもちろんである。それ故智顛は、同体方便という説を力説して、法華経の方便は真実と同体なるものであり、真実と別なる仮のものとか手段というようなもので解釈されてならぬことを言っている。今法華経では真実を云うが、何が真実であるのか。すべての人が佛になるといのが真実だと説いているようであるけれども、実はそうではなくて、すべての人を佛にさせようという佛の願を真実だとし、その真実を実現するために佛は種々の教を説くと言っている。方便というのはその説かれた種々の教が方便なので

なく、眞実を実現するために種々の教を説くそのこと自体が方便なのである。眞実と方便とが一体である所以を知るべきで、經典の深い意味を洞察した智顛の見識はまことに他に比類なきものであった。

法華經が眞実を顯わすというのは、佛がすべての人を佛にさせようという願を顯示したことを指すのであった。その實質内容を忘れて、その文字のみにとられ經卷としての法華經が眞実であり經卷としての他の經は方便であつて眞実でないというならば、それが法華經の精神に合するか又智顛の本意にも添うものであるか。これは問題であらう。すべての人を佛にさせようという佛の願を法華經の指示するままに領受して、自らも佛道を信じ求めて行く、そこにこそ法華經の精神が生きてくるものと言ふべきでないか。淨土教の人々の中にも、法華と念佛とは同時の教であるといい、五時説に同調して法華と念佛とを同等視するかの如き説をなす人もあるが、佛の本願を顯示する意味に於て同等視するのであるならばともかくとして、宗派的に考へたり經卷の価値という意味に受けとつてそれを言うならば、それは恐らく宗派対立形勢の所産にすぎぬと言つてよい。

五

最後に、再び年時の問題に還つて四十余年未顯眞実の意義を考へてみよう。そのためには先ず法華經と無量義經とをわけて考察しなければならぬことを注意しておきたい。法華經と無量義經とは共に佛説とは云われるが、經典としての成立年時は積尊を隔る數百年の後である。そして二經が同時に成立したという証拠もなければ、翻譯の時期も別である。無量義經については、内容的にも、翻譯の事實についても疑問があるが、今ここでは問わぬこととしよう。それでここには法華經だけとりあげることにする。法華經の中にも、これまで成道後四十余年を経たと言われているし、又この經で初めて眞実を説くと言ふ意味のことは言われているから、四十余年未顯眞実という語は無量義經の語であるけれども、一往法華經自体が法華經以前には眞実を説かなかつたと言つているものと解してよい。

さて法華經が眞実を説くと言っているその眞実が何を意味するかというに、それは前にも触れた如く佛陀はすべての人々を佛にするために種々なる教を説くのであって、教は種々に分れていても目的は一つであるという、その佛の願を明かにした所に在った。それを法華經が初めて説くというのは、種々なる教の帰一する目的が今まで明白でなかったから今それを明白に宣説するといふのである。今まで明白でなかったといふのは他の經典がそれを言っていないと言ふのではない。法華經の対象とする所は小乗の説である。従つて小乗ではそれが明白になっていないのを、今大乘に於て明白にするといふのである。それを佛陀の説法といふ形で此が説かれてるのであるから、従来の小乗の説では明らかでなかったと言わないで、佛陀のこれまでの説では明言したことがないといふ言い方で表現されているのである。要するに、佛の教を受けながら佛道を求めて自ら佛とならうと願わぬ者のみの状態にあつた小乗に対して、それは佛教の本旨ではなく、何人も佛陀の教を学ぶ限り自ら佛となることを求めるべきであつて、それが佛陀の根本精神に合致するといふこと、それを佛陀の説法といふ形に於て叙述せられたから、法華經では、今まで眞実を顯さなかつたが今始めて眞実を顯示するのだといふ形になつたのである。

それでは何故に四十余年といふことになつたか。四十余年とは佛の在世の後の方といふ意味である。佛陀の生涯が五十年の伝道生活であつたとすれば、後の方は四十余年とみるのが適當であろう。佛陀は成道以來種々の教を説かれたからこそ、最後にその教の帰一する目的を示す必要があつた。故に佛陀の眞意を明かす法華經は四十余年後の説と表現される。然しそうなると、その前に種々なる教が説かれていなければならぬ。それは帰一する目的を示す前であるから、当然法華經以前の説であつて、法華とは別なものでなければならぬ。そこでこの意味を顯したのが、法華經序品に説かれている無量義經といふ説であつた。法華經序品によれば、今の釈迦佛も昔の日月燈明佛も、初めに無量義經を説いて後に法華經を説かれたとなつてゐる。その意味は、初めに無量義經といふ一つの經を説いて、それから後に法華經といふ他の一つの經を説き、佛はこの二つの經を説いて死んでゆかれたといふようなそんな意味では全

くない。經という時には經の中に説かれている趣旨内容を他にして考えてはならぬ。どこまでもその説こうとして、の意味内容を以て經と見なければならぬのである。従つて当然、法華經の中に無量義經という名があるからと言って、法華經の他に無量義經という特別な經があつたと見るべきでなく、現に無量義經という經があつても、その經の有無にとらわれてはならない。さて以上によつて、釈迦佛も日月燈明佛も無量義經を説いてから法華經を説かれたということが何を意味するかということとは、これではぼぼ了解せられたことと思う。

繰り返して言うならば、佛は初めは種々なる教を説くけれども、後にはその種々なる教が一貫した一つの目的達成のためであつたと打ち明けるといふことである。それを表現する方法として、佛は初めに無量義經を説き、後に法華經を説くと言つたのである。法華經方便品の長行には、

諸の衆生の種々の欲・深心の所著あることを知つて、種種の因縁・譬喩・言辞方便力を以ての故に、而かもために法を説く。舍利弗、かくの如きは皆一佛乗の一切種智を得せしめがんための故なり

と言ひ、又同じく方便品の偈頌には

第一寂滅を知ろしめして、方便力を以ての故に、種々の道を示すと雖も、それ実には佛乗の為なり

という。このように、佛としては衆生の種々の欲・深心の所著を知つて、方便力により種々の道を示すことが最も重要である。然し同時にそれがすべて一佛乗の爲であつたと知らせることも大事なことであつて、前者なくしてはすべての衆生を漏さず救うことができず、後者なくしては種々の教の中何れが佛の真意かを惑うことになる。故に前後対応して初めて教は全うせられると言ふべきで、前後の二者何れも一方を欠いては完全な教と言えぬことになる。もとよりその間に優劣を附けられるべきでない。この場合の前に説かれた種々なる教を今は無量義經と名づけ、後に説かれた目的開明の教を法華經と名づけているのである。若し然りとすれば、法華經は前に説かれた方便の教を否定するものでなく、肯定し価値づけるものであると言ふべきで、法華經のみ真実で他は方便であり仮説であり非真実である

と判定する見解が法華の真意に添う所以でないことが知られるであろう。又無量義経が法華経の前にあるというのは、一代佛教を二大別した場合に前なる無量義経と後なる法華経とに分けられるということであって、多くの諸経を説いた後に晩年になって無量義経と法華経とを相前後して説かれたという如きことを言うのは、決して法華経の本旨ではなかった。この意味に於て、無量義経が説法品の中で、初めに四諦を説き、中ごろ十二因縁を説き、次に方等十二部経・摩訶般若・華嚴海空を説いたと言って、無量義経の前に方等・般若・華嚴等の諸大乘経が説かれたというようなことを言っているのは、最も法華経の趣旨に反する所。況んや、無量義経は成道以後法華経に至るまでの説であり法華経のみが成道四十余年後の説であるということと言ったのが法華経本来の意味であったのに、無量義経自体まで成道後四十余年であるとし、まだ一乘開会を説かぬうちから未顕真実を公言する如きは、甚しく法華の趣旨を誤まるものと言わねばならぬ。

このように見えてくると、法華経を誤解した第一はそもそも無量義経の成立自体の中に在りと言ってよい。そして方便品では辞を尽して如来の方便が讚歎せられているのに、後世その真意を汲まずして方便は非真実にして無価値なりと見た所に、誤解の第二があったのである。

六

佛典は、佛教信仰の伝承と展開の過程に於て、その力説する主張を佛説の名に於て発表したものである。そしてどの経も、中国や日本で古来考えられてきたのとは違って、他の大乘経典と相互の関係を意識し顧慮して編成されたものではなかった。それ故に無量義経のように法華経を知っていてそれに合致せしめようという意図を以て成立した経は別として、普通は多くの大乘諸経典の中におけるその相互の連繫を見出そうとしてもそれは仲々容易でない。ところがたまたま大乘経典の中には、華嚴経のように成道の最初の説と自称するものがあり、又涅槃経のように佛入滅の

直前の説と自認するものもあり、更には又法華經のように成道後四十余年後の説と言っているものもある。そこで中國では早くから諸大乘經の複雑な思想を秩序立てて解釈する一指標として、こうした説時の前後ということに着目され、その結果慧觀の頓漸五時説や天台の五時説等に体系づけられることになった。然し經典成立の事情が上述の如く佛説の記録でなく佛教の根本義解明のために逐次相互の連絡なしに編成されたものである以上、經典の自称する説時が思想体系化の指標とされる時、そこに混乱した解釈を生ずることは免れない。例えば華嚴經は成道後二七日の説とされる。それは正覚の内容たる縁起の法を説くために、聴き手たる人々の能力を顧慮して説法内容の調子を低いものとするということのない形で説こうとしたのである。これ鹿野苑でなされた如き、声聞相手の初転法輪を避けて、それ以前の時処を扱ばねばならなかった所以である。又涅槃經は二月十五日クシナガラの娑羅双樹の間に於て入涅槃の直前の説とされる。それは、佛を肉身にのみ見ている者に対して、佛の本質は法身でありそれが生滅する肉身を越えたものであるということを知らせようとする時、その説法の時処として生身佛入滅の直前とする方が最も効果的であったからに外ならない。かように成道後二七日の時処にせよ二月十七日入滅の時処にせよ、それが歴史的な時点を指示されているのはそこに教義内容を顧慮した上の深い意味があった。つまり經典における時処選択はすべてその經の主張内容に密接な関連を持っているのである。確かに成道の始と入滅の終とは、佛伝中における最も感激的な場面である。然し大乘經典たる華嚴經や涅槃經がそうした場面をとりあげたのは、単に感激的な心情に訴えるというよりも、もっともつと深い主張内容の上から、是非ともその場面でなければ正覚の内容や大涅槃の真義が開頭できないという理由に由るものであった。これらについては、今の法華經の四十余年未顕真実説と同様、古來經の本の意味が往々にして看過されてきている。以て經説の原意把握が如何に容易でないかを知ることができよう。

追記

本稿に関連するものとして拙稿の次の二篇を参照されることを望む。

法華經と佛伝―特に説時論を中心として（印度学佛教学研究十一卷一号）

無量義經について（同二卷二号）